

---

「今、やらしいこと考えたやる。」

こつぶ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「今、やらしいこと考えたやる。」

### 【Nコード】

N4345G

### 【作者名】

こつぶ

### 【あらすじ】

えーと、昔投稿した企画の再アップとなります。「今やらしいこと考えたやる。」付き合い始めの平ちゃん和葉ちゃんの話です。なつかしいわ！

小鳥が餌を強請るために、母鳥の嘴を啄むように、何度も何度もキスをする。

愛しい彼の名前を呼び、潤んだ瞳でお互いを見つめ、そうしてもう一度濃厚に唇を重ねあう。

そんな外国映画の濃厚なキスシーンを、遠山和葉は実家居間にて、半ば口を半開きにして見ていた。

昨日の夜、暇な時間を埋めるがごとくふらりと立ち寄ったレンタルビデオ屋さんで何気なく手にとった外国映画。

1年前に全米を衝撃で駆け巡ったというSF映画。アカデミー賞をいくつも受賞した地上波初だそうで、その年の映画部門でも日本では興行成績ランキングベスト3だったという、超話題作。

和葉自身、初上映から1週間後に友達に誘われて数人で見に行った覚えがあるけれど、あの当時も主人公の俳優に、そして濃厚なキスシーンに黄色い声を上げていたものだった。

あの時は、まだそういうシーンを見ていても、まさか自分が『そう』なるとは思わなかったから

御伽噺や絵空事のようなそんな感じだったから。

好きな人ができて、その人と恋人になれた今。

いつかはこんなことをする日が来るのだろうか……。こういうことが自分にはできるのだろうか。

唇が触れただけのキスは何度かしてきたけれど、本当にこれが自分たちにはできるのだろうか。

いつかは平次とこんなことをするのだろうか。

思わず見ていたビデオを静止して、巻き戻し、リプレイする。

いつかは平次と……。

いつかは……

「いやや、いやや！そんなのでけへん！」

思わず顔を茹蛸状態にして、和葉は近くにあった座布団をぎゅつと抱きしめ、顔の火照りを隠した。

それでもやつぱり恥ずかしくて。

リモコンを向けて、テレビの電源を慌ててオフにした。

「……………何やつとんねん、おまえ……」

「っ！？へ、平つ……何勝手に！チャイム鳴らせえて何度も言うてるやる！！あほ！あほあほあほへーじっ！」

「ああ？……………何コーフンしてんねや、オマエ……暑苦しいやつぢゃなあ……」

その剣幕にぼかんとして見つめる平次の瞳にさらに頭は混乱でぐるんぐるん回っていて。彼は怪訝な顔をしつつ、テレビ電源は消えているが未だ回り続けるビデオ表示と、テーブルの上においてあるレンタルビデオ屋のレシートとの入ったケースを見つけると、

「何、やつとんねん……うわ、それアカデミー賞5冠受賞したつちゆう映画やろ。和葉がようわからん外人にきゃーきゃーうるさく言うてたやつやろ。あほ、そんなん見るやつたら、オレも誘えや。暇やつちゆうねん」

ボヤいたあと、ひよいと畳の上に投げ出されたりリモコンボタンを拾い上げ、手に取った。

一瞬にして和葉の顔は赤から青に変わる。

「アホ！やめえっ！！何、他人んちのテレビ弄くってるんや、ボケー！そんなんしたら嫌われるで！覚えとき！」

そう言いながら彼の手に渡ったりリモコンを奪い返そうと、必死に手を伸ばす。

「はあ？！何言つとんねや、ほんなん今知ったことやないやろ？いつでもしてることやろが！オマエかてオレの家では自分ちみたいに何でも荒らして帰るクセしてっ……」

平次は怪訝な顔をしながら、背を伸ばし、リモコンを持った手を高く掲げた。

イジワルというわけではないらしく、多分反射的なんだろうとも思うけれど、今の和葉にとってそれはイジワルこの上なく。

何度もつま先を伸ばしたり、ぴよんぴよんと跳ねてみるけれど、どうしても背の高い平次の手からそれは奪い取ることはできなくて。

「それとこれとじゃ話は別やっ」

「どう違うんや！」

意味解らない、という顔でさらに高く掲げる平次。ぴよんぴよんと尚も跳ね続ける和葉。

短めのスカートがひらひらとなびき、下着が見えそうになるのも構わずに、今はそれを取り返すことに夢中で。

「……何や、オマエ……。何つつかかってくるんや……？オレオマエに何やしたか？機嫌損ねることしたか？」

「うつさいわ、ボケー！何でもええから早よ返し！一人で見たいんや！平次と見とうないんや！せやから 早よ帰り！オバちゃん  
の美味しい夕食が待つとるでえ！！！」

間髪いれずそんなことを言うから、さすがに平次はむっとしたよう  
うで。

「さつきから聞いてればこのアマ・・・ヒトのこと邪魔モン扱い  
しよつて・・・。だあれが返すかボケエ・・・！！！」

機嫌を損ねたのは平次。明らかに不機嫌そのもので、ひよいと和  
葉が手を伸ばせば、ひよいと別方向に手を移し。横から見れば、も  
う19になるというのに、恋人同士であるはずなのに、恋人のケン  
カじゃなくて。

・・・兄弟喧嘩、もしくは小学生、中学生の好きあうカップル同  
士のケンカにしか見えなかった。

「返せつちゅーてんやる！」

「かーえーすーかーぼーけー！」

いーつと両手を使ってアカンベエをする平次に向かって、和葉も  
イライラが溜まってきたとき、不意にその電源は付けられた。

「あ・・・」

平次の指が電源のところをちょうどオンにしていたようで。

・・・そのシーンが再生される。

『ジヨディ・・・愛してる・・・』

『……もうどこにも行かないで……ね……私だけを見ていて……』

『ああ、行かないさ、……ジヨディ……』

『好きよ、マイケル……世界中の誰よりも……離さないで。……いつまでも永久に……。抱きしめていて……』

会話会話に途切れるのは、彼らの濃厚なキスシーン。

それを見たたん、平次の目は大きく見開いて。和葉は慌てて平次から離れると、主電源を切った。ハアハア……。と思わず息が上がる。

見られた、見られた。……見られた。

「……………ふうん」

リモコンを手にしたまま、しばらく画面を見ていたが、顎に指をかけ、平次は「ふむ」と呟く。

「それで、か」

「それでって何なん!？」

思わず攻撃的な口調になってしまふ。振り返り、真っ赤な顔で平次を睨みすぎる。

「和葉……」

「そやから何なん!？」

責めたければ責めればええやん。

そう覚悟は決めていたはずなのに。

「今……やらしいこと考えてたやる」

「っ……!!!!」

「なるほど。さしずめこの男優がオレ、このべっぴん女優がオマ

エ……ちゆうことか」

「そ、そないなことない！」

「嘘や、顔に書いてあるで？さつきから。……それが揺ぎ無い

証拠や、残念やったな、……犯人ハン？」

にやり、平次が笑って。

一瞬の沈黙の後、ますます顔が紅に染まっていった。

あほ。

あほ。

あほ。

何そんなこと言葉にすんねん！

そんな嬉しそつに、好色そつにアタシを見んねん！

あほ。

あほ。

「あほ……っ!!!!」

和葉はもう頭の中が地震や津波に巻き込まれているかのように大混乱していて、思わず部屋を飛び出した。

後にはぼかんとした平次が取り残されただけだった。

「何や、実践するんやないんか……」

ポツリ平次が寂しそつに、つまらなさそつに呟いたのは和葉にはまだ秘密。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4345g/>

---

「今、やらしいこと考えたやろ。」

2010年10月9日04時21分発行